

## ① 名古屋市における貝類の概況

名古屋市に棲息している（していた）貝類は、レッドデータブックなごや2004（名古屋市動植物実態調査検討会，2004）の名古屋市産貝類目録に73種が掲載されている。同様にレッドデータブックなごや2010（名古屋市動植物実態調査検討会，2010）の名古屋市産貝類目録には、外来種、国内移入種を含め92種が掲載されている。レッドリスト種に掲載されており目録に掲載されていない種が18種存在するため、これをあわせるとレッドデータブックなごや2010では110種が掲載されたことになる。レッドデータブックなごや2015（名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課，2015）では、現地調査（文献調査を含む）により40種が目録に新たに追加された。ドブガイについてはヌマガイとタガイに分けられた（計算上はヌマガイとタガイが追加されドブガイが削除された）。これにより名古屋市産貝類目録は149種となった。さらに今回の現地調査（文献調査と博物館収蔵標本調査を含む）により12種（絶滅種を含む）が目録に新たに追加され、名古屋市産貝類目録の更新されたリストは161種となった。このうち、今回のレッドリスト2020掲載種は94種であり、その内訳は、海産（汽水性種を含む）57種、淡水産20種、陸産17種である。これらのうち、今回新たに追加されるのは、海産（汽水性を含む）3種と淡水産9種である。

海産（汽水性種を含む）種については、河口域から潮間帯を中心とした現地調査に加えて、2018年10月20日に名古屋港ポートアイランド附近において潮下帯のドレッジ調査を実施した。これにより、今回新たに庄内川河口の塩性湿地からクリイロコミミガイ、名古屋港ポートアイランド附近からオキナガイとツヤガラスが発見され、それぞれをリストに追加した。

名古屋市で部分的に自然海岸が残されているのは、庄内川河口・新川河口から藤前干潟のみであり、潮下帯に棲息する種を除けば海産種のほとんどはこれらの地域に生棲息している。特に庄内川河口域には大規模なヨシ原湿地（塩性湿地）が残っており、このような特異な環境にのみ棲息する稀少種が多く見られる。ヨシ原湿地周辺には砂泥干潟が広範囲に露出し、砂泥底に棲息する種をあわせれば、庄内川河口域の貝類相は比較的豊かである。一方、藤前干潟では庄内川、新川や日光川から流入する淡水の影響を強く受け、低い塩分濃度でも棲息できる広塩性の種しか棲息できないと考えられる。また、砂質部分は少なく強熱減量の値の高い泥質が優占することから（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は棲息が困難であり貝類相を貧弱にしている。

淡水産種については、2017年に市民参加型（参加者219名）による市内61地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査が実施されたことにより（川瀬，2018a）、市内における淡水産貝類の種毎の詳細な分布状況が明らかになった。また、鳳来寺山自然科学博物館の収蔵庫において、名古屋市を含む愛知県内で1930～50年代に採集された淡水産貝類標本（川瀬，2018b）や文献資料（田中，1959；田中，1964）が見つかり、今回新たに絶滅種を含めて9種の淡水産貝類を追加した。

特筆すべきは、守山区と尾張旭市の境界周辺に存在する多くの溜池の調査を実施し、2019年2月に滝ノ水池において、名古屋市内からの絶滅の可能性すら検討していたイシガイの生貝を30年以上ぶりに発見したことである（川瀬ほか，2020）。一方、市内の大部分の水田・水路では汚濁耐性種や汚濁指標種であるヒメタニシ、スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）、サカマキガイ、ヒメモノアラガイが多産することが多い。

陸産種（陸産貝類）については、2012年に市民参加型（参加者456名）による名古屋市陸貝一斉調査（市内全16区33地点）が開催されたことにより（川瀬，2013）、既に市内における

陸産貝類の種毎の分布状況が明らかになっている。市内に広く分布し比較的個体数の多い陸産貝類は、ナミコギセル、トクサオカチョウジガイ、ホソオカチョウジガイ、オカチョウジガイ、ウスイロシタラ、ウラジロベッコウ、ヒメコハク、コハクガイやイセノナミマイマイである。市内に残された自然度の高い雑木林は少なく、相生山緑地、名古屋城外堀、熱田神宮、庄内川河畔林など神社や公園を含む特定の地域のみで生き残っている陸産貝類が存在する。特に守山区からは、ピロウドマイマイ属の一種（川瀬ほか，2014）、ニッポンマイマイ、コベソマイマイ、ヤマタニシなどが発見されている。これらはいずれも名古屋市では棲息域が限られており、各地の棲息個体数も少なく稀少種である。一方、熱田神宮から発見されたシリオレギセル（川瀬，2012）は明らかな国内移入種である。他には国内移入種としてウスイロオカチグサやコハクオナジマイマイ、外来種としてノハラナメクジやチャコウラナメクジなどが記録されている。

## ②名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回掲載のレッドリスト該当種は、絶滅 10 種、絶滅危惧 I A 類 26 種、絶滅危惧 I B 類 9 種、絶滅危惧 II 類 13 種、準絶滅危惧 31 種、情報不足 5 種の全 94 種である。海産（汽水性を含む）種では、絶滅 3 種、絶滅危惧 I A 類 22 種、絶滅危惧 I B 類 5 種、絶滅危惧 II 類 7 種、準絶滅危惧 20 種、情報不足 1 種、淡水産種では、絶滅 7 種、絶滅危惧 I A 類 4 種、絶滅危惧 I B 類 2 種、絶滅危惧 II 類 4 種、準絶滅危惧 1 種、情報不足 3 種、陸産種（陸産貝類）では、絶滅危惧 I B 類 2 種、絶滅危惧 II 類 2 種、準絶滅危惧 10 種、情報不足 1 種である。

今回新たに追加されたのは、絶滅（EX）が淡水産のオバエボシガイ、マツカサガイ、トンガリササノハガイ、カタハガイの 4 種である。4 種ともに名古屋市を含む愛知県内で 1930～50 年代に採集された標本（川瀬，2018b）や文献資料（田中，1959；田中，1964）が見つかったことにより、かつて市内に棲息していたことが明らかになった。また、淡水産のマメタニシは、レッドデータブックなごや 2015（名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課，2015）においても市内から絶滅した可能性が指摘されており、市民参加型による市内 61 地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査（川瀬，2018a）や今回のリスト作成における現地調査においてもその棲息を確認できないことから、絶滅危惧 I A 類から絶滅にランクアップした。淡水産のモノアラガイは、棲息地の全てにおいて形態的に類似する外来種におきかわっていたことから（川瀬，2018c）、絶滅危惧 I B 類から絶滅にランクアップした。

絶滅危惧 I A 類に追加されたのは汽水性（海産種）のクリイロコミミガイ 1 種である。2016 年 4 月に愛知県での棲息が名古屋市庄内川河口の塩性湿地で確認された（木村ほか，2019）。現在でもこの一箇所以外からは発見されていない。

絶滅危惧 I B 類に追加されたのは海産種のオキナガイ 1 種である。2018 年 10 月に潮下帯のドレッジ調査を実施したことにより市内での棲息を確認した。海産種（汽水性種）のハマグリについては、庄内川河口干潟において以前より少しずつ個体数が増えていることから、絶滅危惧 I A 類から絶滅危惧 I B 類にランクダウンした。

絶滅危惧 II 類に追加されたのは海産のツヤガラス、淡水産のヒメヒラマキミズマイマイとドブシジミである。ツヤガラスは 2018 年 10 月に実施したドレッジ調査で発見された。ヒメヒラマキミズマイマイとドブシジミについては、市内 61 地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査など（川瀬，2018a；川瀬ほか，2018）により、市内での棲息地点数・個体数ともに極めて少ないことが明らかになったため今回新たに追加した。淡水産のヒラマキガイモドキは市内全域が広く調査

された結果、守山区にしか棲息していないため準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類にランクアップした。

今回新たに追加された準絶滅危惧種はない。

情報不足には淡水産のカワニナ、チリメンカワニナ、フネドブガイの3種を新たに追加した。カワニナとチリメンカワニナについては1980年代には市内でほとんど見られなかったことが明らかになり、また最近発見されている地点のいくつかはゲンジボタル養殖用の餌として人為的に投入されたことも明らかになった。フネドブガイは2019年12月に実施された西区庄内緑地公園のガマ池の池干し調査により市内から初めて確認された。本種が在来個体群である確かな証拠はなく、移入個体群である可能性も否定できないことから情報不足とした。陸産のオオウエキビについては、名古屋市陸貝一斉調査（川瀬，2013）やその後の調査により、市内全域に広く分布していることが明らかになったのでリストから除外した。

### ③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各貝類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

#### 【掲載種の解説（貝類）に関する凡例】

##### 【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—（無脊椎動物編Ⅲ）」（環境庁編，1998）に準拠した。

##### 【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—（無脊椎動物編Ⅲ）」（環境庁編，1998）に準拠した。

##### 【評価区分】

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右の上枠内に記述した。参考として「レッドリストあいち2020」「レッドデータブックあいち2020」（愛知県，2020）の愛知県での評価区分、及び「環境省レッドリスト2019」（環境省，2019）の全国での評価区分も併記した。

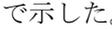
##### 【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

##### 【形態】

対象種の形態の概要を記述し写真を掲載した。

##### 【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごと、一部は沿岸部に着色して市内分布図として掲載した。ただし、絶滅と判断された地域は  域は  で示した。

##### 【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

##### 【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

##### 【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

##### 【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

##### 【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

##### 【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

**オバエボシガイ** *Inversidens brandti* (Kobelt, 1879)

**【選定理由】**

愛知県では1950年代に、岩倉、大府、今村、榑塚の4ヶ所から記録されており(田中, 1959)、1970年頃の豊川市の牟呂用水での生貝の確認記録を最後に、既に絶滅しているが(愛知県環境調査センター, 2009)、1960年代まで名古屋市(鳴海・天白)

に棲息していたことを示す資料(田中, 1964)が見つかった。鳳来寺山自然科学博物館には庄内川で1930~50年代に採集されたと考えられる図示した標本が所蔵されている。

自然度が高く水質の良い小川や用水路に棲息するが、市内では本種の生息できる良好な環境は改修や汚染が進み壊滅的である。

2017年に市内61地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査が実施されたが(川瀬, 2018)、本種は発見されていない。

**【形態】**

殻は前後に短い歪んだ台形で膨らむ。後端は斜めに裁断状。後背部はやや肩が張る。殻長42mm。殻表は褐色~黒色で殻頂周辺で漣状の彫刻に覆われるが、図示した標本は殻頂付近が溶食される。内面は橙色を帯びた真珠光沢をもつ。左右両殻にヘラ状の擬主歯が1つある。後側歯は強く刻み目彫刻が顕著。

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

鳴海・天白に棲息していた(田中, 1964)。

**【県内の分布】**

1960年代中頃までの木曾川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系(愛知県教育センター, 1967)。

**【国内の分布】**

伊勢湾流入河川以西の本州と九州(増田・内山, 2004)。ただし愛知県では絶滅。

**【生息地の環境/生態的特性】**

上述したように、自然度が高く水質の良い小川や用水路の砂泥底に棲息する。グロキディウム幼生の寄主となるヨシノボリの仲間の棲息が必要である。

**【過去の生息状況/絶滅の要因】**

本種の生息できる小川や用水路は改修や汚染が進み壊滅的である。用水路の3面コンクリート張りや冬季の断水、さらにはブラックバスなどの外来魚によるヨシノボリ類の捕食による個体数減少が影響する。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009—動物編一, 651 pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222 pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.  
 川瀬基弘, 2018. なごや生きものの一斉調査・2017~なごやで探そう! 水の中の妖精~淡水貝編 報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.  
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ, 東京.  
 田中守彦, 1959. 愛知県産淡水産貝類目録(謄写版). 14 pp.  
 田中守彦, 1964. 名古屋市産淡水貝類の研究(謄写版). 20 pp.

**【関連文献】**

川瀬基弘, 2018. 滅びゆく愛知県の淡水産貝類—鳳来寺山自然科学博物館所蔵の淡水貝標本一. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 47: 41-46.  
 川瀬基弘・市原 俊・寺本匡寛・鶴飼 普, 2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性, 5: 33-45.  
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報, 33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.  
 近藤高貴, 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜 日本貝類学会特別出版物第3号, 69 pp, 日本貝類学会, 東京.

評価区分

名古屋市2020	絶滅
愛知県2020	絶滅
環境省2020	絶滅危惧Ⅱ類



**マツカサガイ** *Inversidens japonensis* (Lea, 1859)

**【選定理由】**

愛知県内では1950年代に、犬山、岩倉、須ヶ口、神領、鳴海、豊明、大府、今村、榊塚、国府から記録されている（田中，1959）。愛知県では絶滅危惧ⅠA類に選定されており（愛知県環境調査センター，2009）、名古屋市内では、1950～60年代に島田橋、中根、植田橋、鳴海・白山、鳴海・天白、汁谷・竹越、味鋺市営住宅に棲息していた記録がある（田中，1964）。鳳来寺山自然科学博物館には名古屋で1930～50年代に採集されたと考えられる標本が所蔵されている。しかし、近年の調査により本種が名古屋市内に生き残っている可能性はないと考えられる。2017年に市内61地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査が実施されたが（川瀬，2018）、本種は発見されていない。

**【形態】**

殻は卵円形、膨らみは弱くて平たい。殻長40～60mmで大型個体では80mmを超える。図示した標本は殻長35mm程度の幼貝。殻表は褐色～黒色でV字状の彫刻がある。老成すると殻頂付近が溶食されることがある。内面は真珠光沢をもつ。右殻の擬主歯は三角状で強く、後側歯も強く長い。

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

島田橋、中根、植田橋、鳴海・白山、鳴海・天白、汁谷・竹越、味鋺市営住宅に棲息していた（田中，1964）

**【県内の分布】**

新城市、西尾市、岡崎市、豊川市などに分布するが地点数は減少している。

**【国内の分布】**

本州、四国、九州（近藤，2008）

**【生息地の環境／生態的特性】**

自然度が高く水質の良い小川や用水路の砂泥底に棲息する。グロキディウム幼生の寄主となるヨシノボリの仲間の棲息が必要である。

**【過去の生息状況／絶滅の要因】**

本種の生息できる小川や用水路は改修や汚染が進み壊滅的である。用水路の3面コンクリート張りや冬季の断水、さらにはブラックバスなどの外来魚によるヨシノボリ類の捕食による個体数減少が影響する。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター，2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009—動物編—，651 pp. 愛知県環境部自然環境課，名古屋。  
川瀬基弘，2018. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書，40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋。  
近藤高貴，2008. 日本産イシガイ目貝類図譜 日本貝類学会特別出版物第3号，69 pp，日本貝類学会，東京。  
田中守彦，1959. 愛知県産淡水産貝類目録(謄写版). 14 pp.  
田中守彦，1964. 名古屋市産淡水貝類の研究(謄写版). 20 pp.

**【関連文献】**

愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。  
川瀬基弘，2018. 滅びゆく愛知県の淡水産貝類. 鳳来寺山自然科学博物館館報，47: 41-46.  
川瀬基弘，2019. 愛知県に棲息していたニセマツカサガイ. 鳳来寺山自然科学博物館館報，48: 53-55.  
川瀬基弘・市原 俊・寺本匡寛・鶴飼 普，2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性，5: 33-45.  
増田 修・内山りゅう，2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ，東京。  
木村昭一，1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報，33:14-34. 全国高等学校水産教育研究会。

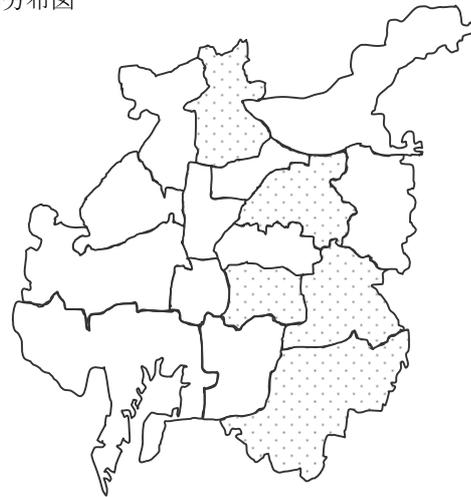
評価区分

名古屋市2020	絶滅
愛知県2020	絶滅危惧ⅠA類
環境省2020	準絶滅危惧



マツカサガイ  
名古屋、採集日不明、鳳来寺山自然科学博物館所蔵

市内分布図



ササノハガイ (トンガリササノハガイ) *Lanceolaria grayana* (Lea, 1834)

評価区分

名古屋市2020	絶滅
愛知県2020	絶滅危惧 I A類
環境省2020	準絶滅危惧

【選定理由】

愛知県内では1950年代に、犬山、岩倉、須ヶ口、神領、鳴海、豊明、大府、今村、榑塚、国府から記録されている(田中, 1959)。愛知県では絶滅危惧 I A類に選定されており(愛知県環境調査センター, 2009)、名古屋市内では、尾張岩塚村[名古屋市中村区岩塚町](岩川, 1919)、瑞穂区山崎川水系[昭和30~40年代](川瀬ほか, 2016)、1950~60年代に鳴海・白山、鳴海・天白、味鋺市管住宅(田中, 1964)に棲息していた記録がある。鳳来寺山自然科学博物館には西春 師勝 五条川で昭和12年に採集された標本が所蔵されている。しかし、近年の調査により本種が名古屋市内に生き残っている可能性はないと考えられる。2017年に市内61地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査が実施されたが(川瀬, 2018)、本種は発見されていない。

【形態】

殻は笹の葉状に極端に細長く、前縁は丸く、後部は細まり後端は尖る。殻長10~20 cm。殻表は褐色~黒色で、不明瞭な皺状彫刻がある。内面は真珠光沢をもつ。右殻の擬主歯は三角形で強い。



ササノハガイ, 鳳来寺山自然科学博物館所蔵  
西春 師勝 五条川, 昭和12年8月15日採集、

【分布の概要】

【市内の分布】

上述のとおり中村区、北区、瑞穂区、緑区に棲息していた。

【県内の分布】

豊田市、西尾市、豊橋市などに棲息するが地点数は極めて少ない。

【国内の分布】

三河湾流入河川以西の本州、四国、九州

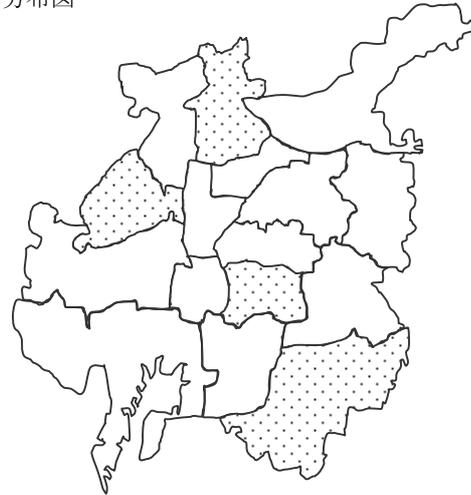
【生息地の環境/生態的特性】

自然度が高く水質の良い小川や用水路の砂礫~砂泥底に棲息する。グロキディウム幼生の寄主となるヨシノボリの仲間の棲息が必要である。

【過去の生息状況/絶滅の要因】

本種の生息できる小川や用水路は改修や汚染が進み壊滅的である。用水路の3面コンクリート張りや冬季の断水、さらにはブラックバスなどの外来魚によるヨシノボリ類の捕食による個体数減少が影響する。

市内分布図



【特記事項】

九州の個体群は本州の個体群とは遺伝的に異なるため、別種キュウシュウササノハガイとして記載された(Kondo and Hattori, 2019)。

【引用文献】

- 岩川友太郎, 1919. 日本産貝類標本目録. 東京帝室博物館, 東京. 318, 95, 39 pp.  
川瀬基弘, 2018. なごや生きものの一斉調査・2017~なごやで探そう! 水の中の妖精~淡水貝編 報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.  
川瀬基弘・大矢美紀・松原美恵子・森山昭彦, 2016. 名古屋市瑞穂区に生息していたトンガリササノハガイ. なごやの生物多様性. 3: 55-60.  
Kondo, T. and A. Hattori, 2019. A New Species of the Genus *Lanceolaria* (Bivalvia: Unionidae) from Japan. *Venus*, 78(1-2): 27-31.  
田中守彦, 1959. 愛知県産淡水産貝類目録(謄写版). 14 pp.  
田中守彦, 1964. 名古屋市産淡水貝類の研究(謄写版). 20 pp.

【関連文献】

- 川瀬基弘, 2018. 滅びゆく愛知県の淡水産貝類. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 47: 41-46.

**カタハガイ** *Obovalis omiensis* (Heimburg, 1884)

**【選定理由】**

愛知県では1950年代に、犬山、岩倉、神領、東山、鳴海、豊明、今村、榑塚、国府から記録されているが(田中, 1959)、1970年頃を最後に、既に絶滅している(愛知県環境調査センター, 2009)。名古屋市内では1960年代まで、植田橋、鳴海・天白、

汁谷・竹越、猪高弘山、味鋺市営住宅、鶴舞公園に棲息していたことを示す資料(田中, 1964)が見つかった。鳳来寺山自然科学博物館には五条川や新川で1930~50年代に採集されたと考えられる標本が所蔵されている。

自然度が高く水質の良い小川や用水路に棲息するが、市内では本種の生息できる良好な環境は改修や汚染が進み壊滅的である。

2017年に市内61地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査が実施されたが(川瀬, 2018)、本種は発見されていない。

**【形態】**

殻は長卵形で膨らみは弱く平たい。後背部はやや肩が張る。殻長44mm。殻表は褐色~黒色で後側部に分岐した肋状の彫刻がある。殻頂付近が多少溶食される。内面は真珠光沢をもつ。擬主歯はヘラ状で、後側歯は弱く不明瞭である。

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

植田橋、鳴海・天白、汁谷・竹越、猪高弘山、味鋺市営住宅、鶴舞公園に棲息していた(田中, 1964)。

**【県内の分布】**

1960年代中頃までの木曾川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系(愛知県教育センター, 1967)。

**【国内の分布】**

愛知県以西の本州から九州北部(増田・内山, 2004)。ただし愛知県では絶滅。

**【生息地の環境／生態的特性】**

上述したように、自然度が高く水質の良い小川や用水路の砂泥底に棲息する。グロキディウム幼生の寄主となるヨシノボリの仲間の棲息が必要である。

**【過去の生息状況／絶滅の要因】**

本種の生息できる小川や用水路は改修や汚染が進み壊滅的である。用水路の3面コンクリート張りや冬季の断水、さらにはブラックバスなどの外来魚によるヨシノボリ類の捕食による個体数減少が影響する。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009—動物編一, 651 pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
 愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.  
 川瀬基弘, 2018. なごや生きもの一斉調査・2017~なごやで探そう! 水の中の妖精~淡水貝編 報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.  
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ, 東京.  
 田中守彦, 1959. 愛知県産淡水産貝類目録(謄写版). 14 pp.  
 田中守彦, 1964. 名古屋市産淡水貝類の研究(謄写版). 20 pp.

**【関連文献】**

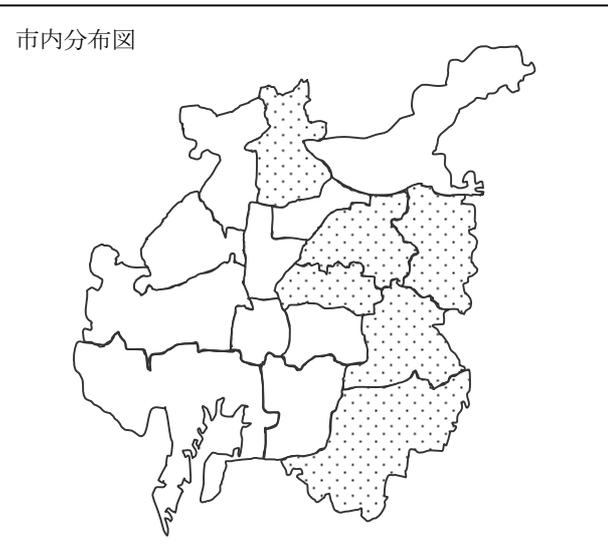
川瀬基弘, 2018. 滅びゆく愛知県の淡水産貝類. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 47: 41-46.  
 川瀬基弘・市原 俊・寺本匡寛・鶴飼 普, 2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性, 5: 33-45.  
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, 33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.  
 近藤高貴, 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜 日本貝類学会特別出版物第3号, 69 pp, 日本貝類学会, 東京.

評価区分

名古屋市2020	絶滅
愛知県2020	絶滅
環境省2020	絶滅危惧II類



カタハガイ  
五条川、採集日不明、鳳来寺山自然科学博物館所蔵



クリイロコミミガイ *Laemodonta siamensis* (Morelet)

評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2020	絶滅危惧ⅠA類
環境省2020	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は、伊勢湾から南西諸島に分布するが、九州以北では生息地は少なく、湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地に生息する。本種の分布の東限かつ北限は伊勢湾であるが、愛知県内では生息が確認されたことがなかった。2016年4月7日、初めて愛知県側の伊勢湾沿岸で本種の生息地が発見された(木村・他, 2019)ので、詳細な生息状況を報告する。

本種の生息環境である湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地自体が護岸工事や埋め立てによって著しく減少しており、本種の生息基盤は脆弱である。現在県下(名古屋市下)に1箇所の生息場所しか確認されていないこと、その生息場所の面積が著しく小さいことから非常に絶滅の危険性が高い種と評価された。

【形態】

本種は殻長約7mmの小型のオカミミガイ科貝類である。殻は卵形、殻表は強い螺肋で覆われ、殻口外唇に1個の歯状突起、内唇側に2個の歯状突起、殻軸に1個の歯状突起が発達する。クリイロコミミガイは殻頂が欠損することが多い(本土産個体に顕著)。



クリイロコミミガイ、2016年4月7日採集  
港区庄内川河口、木村昭一 撮影

【分布の概要】

【県内、市内の分布】

名古屋市庄内川河口の塩性湿地(伊勢湾沿岸)の1箇所で、その面積も著しく小さい。

【国内の分布】

本州(愛知県;伊勢湾)から三重県側伊勢湾、五ヶ所湾、瀬戸内海、吉野川河口、博多湾、伊万里湾、九州西岸、有明海、八代海、八重山諸島に分布するが南西諸島と九州以北では生息環境、生息状況、殻の形態に違いがある(福田・木村, 2012)。

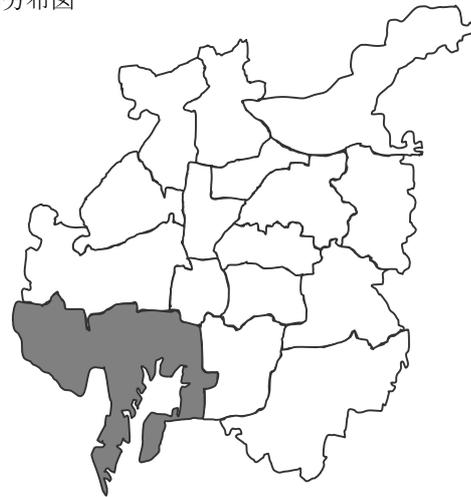
【世界の分布】

東南アジア(福田・木村, 2012)。

【生息地の環境/生態的特性】

湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地に生息し、オカミミガイ科としてはやや低い地盤高に生息し、庄内川河口域の生息地では最高が2.38m、最低が2.09mであった(木村・他, 2019)。泥分の多い砂泥底に半ば埋もれた直径約30cmの砂岩の裏面に、泥と共に2個体が寄り添って付着していた。同砂岩裏面には直径約3cmの螺旋状に巻いた泥紐状卵塊が生み付けられていた(2016年4月7日;木村・他, 2019)。

市内分布図



【現在の生息状況/減少の要因】

【選定理由】の項を参照。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地(下流に堰が出来ると消失する)のこれ以上の破壊、埋め立てを行わないことが保全の第1歩である。

【特記事項】

名古屋市(愛知県)における生息地は、2016年に初めて1箇所だけで確認された。この生息地は、本種の現在の分布域の北限かつ東限である。なお、本種は三河湾には分布しない。

【引用文献】

福田 宏・木村昭一, 2012. クリイロコミミガイ, p. 97. In: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.  
木村昭一・木村妙子・村山 椋, 2019. 愛知県(伊勢湾)で初めて生息が確認されたクリイロコミミガイ. かきつばた, 44: 40-43. (木村昭一)

**オキナガイ** *Laternula anatine* (Linnaeus, 1758)

**【選定理由】**

2018年10月20日に実施した名古屋港ポートアイランド附近のドレッジ調査によって生貝が1個体のみ得られた。本種は、内湾から湾口部にかけての干潟から潮下帯の砂泥底に棲息する。また、外洋の潮下帯～水深60mの砂泥底にも棲息する。

愛知県内では内湾域の潮下帯の環境は、上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで悪化している（愛知県環境調査センター, 2009）。特に名古屋市港区では、埋め立てや水質汚濁、ヘドロの堆積が著しい。このように本種の棲息環境は著しく悪化しており、名古屋市においては棲息環境も限局的である。さらに、名古屋港ポートアイランド附近の複数地点でドレッジ調査を各地点2回ずつ実施したが1個体のみしか発見できなかった。

**【形態】**

殻は長楕円形、薄質、銀白色半透明で比較的良好に膨らむ。図示した個体の殻長は約36mm。表面には微小な顆粒があり、ざらざらしている。後部は細まり吻状に突出し、後端は開く。内面は真珠光沢をもつ。殻帯を欠く。外套線湾入は浅い。

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

名古屋港ポートアイランド附近

**【県内の分布】**

三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖、渥美潮下帯（愛知県環境調査センター, 2009）

**【国内の分布】**

房総・男鹿半島以南、日本海、四国、九州（肥後・後藤, 1993）

**【生息地の環境／生態的特性】**

内湾から湾口部にかけての干潟から潮下帯の砂泥底に棲息する。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

愛知県下の状況（愛知県環境調査センター, 2009）と同様に、本種の棲息する干潟から潮下帯の環境は破壊されており、生息場所、棲息個体数ともに減少したと考えられる。

**【保全上の留意点】**

干潟から潮下帯の環境を保全する。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009—動物編一, 651 pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
肥後俊一・後藤芳央, 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録, 3+22+693+13+148 pp. エル貝類出版局, 八尾.

**【関連文献】**

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報, 35: 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.  
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた, 26: 18-20.  
西條八東・八木明彦・梅村麻希・寺井久慈・川瀬基弘・松川康夫・佐々木克之, 2004. 中部空港島周辺における底質・底生動物を中心とした水域環境変化に関する研究. プロ・ナトゥーラ・ファンズ第13期助成成果報告書: 3-16.  
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島 哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤 真・島村賢正・福田 宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

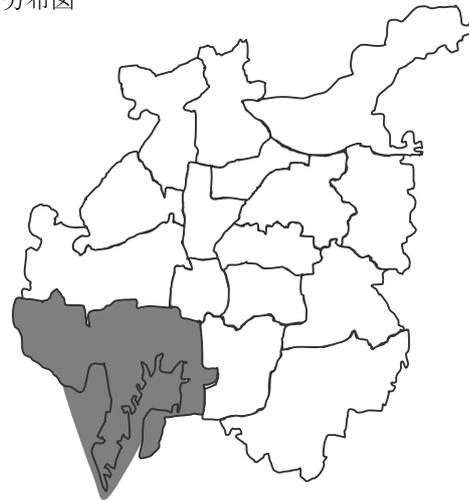
評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧IB類
愛知県2020	準絶滅危惧
環境省2020	リスト外



オキナガイ 2018年10月20日採集  
名古屋港ポートアイランド附近

市内分布図



（執筆者 川瀬基弘）

ヒメヒラマキミズマイマイ *Gyraulus* sp.

【選定理由】

主に止水域の水生植物に付着して生活しており(増田・内山, 2004)、市内では北区、守山区、千種区の限られた水田のみに棲息するが、市内の溜池では発見されていない。市内の棲息地点は上記3区の4地点の水田のみであり、同科のヒラマキミズマイマイに比べて棲息地点が極めて少ない。

【形態】

殻は扁平な平巻き形で、殻径 2mm 程度。本種は同じサイズのヒラマキミズマイマイに比べると、螺管が細くて巻き数が多く殻高が低いことで区別できるが、これらの特徴は相対的で明確に区別するのが困難な場合もある。Mori (1938) の記載では、本種はヒラマキミズマイマイより小さく、周縁部が角張らない(キール状にならない)ことで容易に区別できるとされている。

実際には、ヒメヒラマキミズマイマイの殻径は 2 mm 前後の個体が多く、ヒラマキミズマイマイは 3.5 ~ 6 mm 程で、殻の大きさによって概ね区別できた。前種ヒラマキミズマイマイと比較して、ヒメヒラマキミズマイマイは COI 領域の変異が少ないことが報告されている(川瀬ほか, 2016)。

【分布の概要】

【市内の分布】

北区、守山区、千種区

【県内の分布】

岡崎市、豊田市、西尾市

【国内の分布】

本州~南西諸島(齊藤ほか, 2017)

【生息地の環境/生態的特性】

主に止水域の水生植物に付着して生活している。

【現在の生息状況/減少の要因】

水田の水質汚濁や溜め池に棲息する水生植物の減少が影響していると考えられる。

【保全上の留意点】

水田の水質・底質の汚濁防止。

【特記事項】

本種の学名については、Mori (1938: 289-290, pl. 14, fig. 7) による *Anisus* (*Gyraulus*) *pulcher* のホロタイプ(京都大学総合博物館所蔵)がヒラマキミズマイマイとみなされるものであったことが報告されており(齊藤ほか, 2017)、*Gyraulus* sp.とした。

【引用文献】

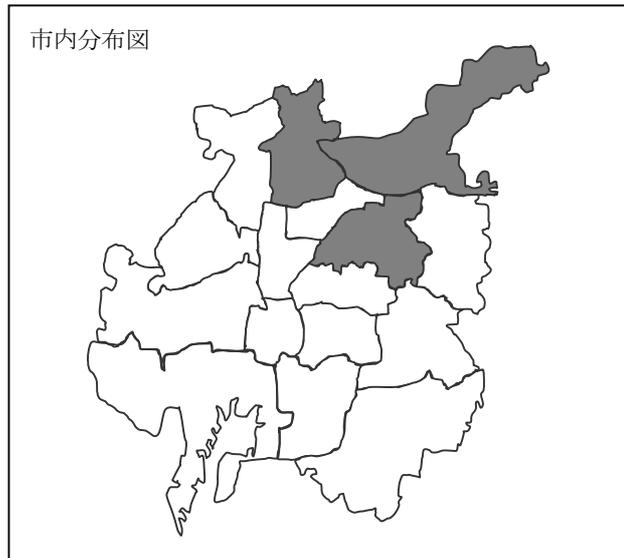
- 川瀬基弘・松原美恵子・森山昭彦, 2016. 愛知県西三河地域から採集されたヒラマキガイ属3種: 形態と遺伝子情報による解析. 陸の水, 74: 43-48.
- 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ, 東京.
- Mori, S., 1938. Classification of the Japanese Planorbidae. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B*, 14(2): 279-300, pls. 12-18.
- 齊藤 匠・平野尚浩・内田翔太・山崎大志, 2017. 石垣島および西表島におけるヒメヒラマキミズマイマイ(腹足綱: ヒラマキガイ科)の発見. *Molluscan Diversity*, 5(1-2): 79-82.

【関連文献】

- 川瀬基弘, 2018. なごや生きもの一斉調査・2017~なごやで探そう! 水の中の妖精~淡水貝編 報告書. 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- 川瀬基弘・市原 俊・寺本匡寛・鶴飼 普, 2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性, 5: 33-45.
- 川瀬基弘・寺本匡寛, 2018. なごや生きもの一斉調査~淡水貝編~. 平成 29 年度なごや生物多様性保全活動協議会活動報告書:22-25, なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧II類
愛知県2020	リスト外
環境省2020	絶滅危惧IB類



**ツヤガラス** *Jolya rhomboidea* (Reeve, 1857)

評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2020	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2020	リスト外

**【選定理由】**

2018年10月20日に実施した名古屋港ポートアイランド附近のドレッジ調査によって生貝が数個体得られた。

本種は、内湾から湾口部にかけての潮下帯の砂泥底に棲息する。愛知県内では内湾域の潮下帯の環境は、上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで悪化している（愛知県環境調査センター, 2009）。特に名古屋市港区では、埋め立てや水質汚濁、ヘドロの堆積が著しい。このように本種の棲息環境は著しく悪化しており、名古屋市においては棲息環境も限局的である。

さらに、名古屋港ポートアイランド附近の複数地点でドレッジ調査を各地点2回ずつ実施したが、殻長25mm程度の小型個体のみを数個体発見できたに過ぎない。

**【形態】**

殻は細長く、やや薄質。殻長は80mmを超えるが、名古屋市で発見された個体はいずれも25mm程度の小型個体ばかりである。殻皮は黄土～栗色で強い光沢がある。殻頂は前方に位置し、後背縁は長く、角をもつ。後端は斜めに裁断状。内面の真珠光沢は強い。繭状の巣をつくる。



ツヤガラス 2018年10月20日採集  
名古屋港ポートアイランド附近

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

名古屋港ポートアイランド附近

**【県内の分布】**

三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖の潮下帯（愛知県環境調査センター, 2009）

**【国内の分布】**

北海道函館湾・能登半島以南、紀伊、九州（肥後・後藤, 1993）

**【生息地の環境／生態的特性】**

内湾から湾口部にかけての潮下帯の砂泥底に棲息する。生時には泥を被った繭状の巣に入っている（愛知県環境調査センター, 2009）。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

愛知県下の状況（愛知県環境調査センター, 2009）と同様に、本種の棲息する潮下帯の環境は破壊されており、生息場所、棲息個体数ともに減少したと考えられる。

**【保全上の留意点】**

潮下帯の環境を保全する。内湾域の富栄養化の防止、潮下帯から連続する干潟などの潮間帯の環境保全が不可欠である。

**【特記事項】**

別名は、カラスノマクラ、ツキヨガラス。

**【引用文献】**

愛知県環境調査センター, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009—動物編一, 651 pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.  
肥後俊一・後藤芳央, 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録, 3+22+693+13+148 pp. エル貝類出版局, 八尾.

**【関連文献】**

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報, 35: 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.  
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた, 26: 18-20.  
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島 哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤 真・島村賢正・福田 宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

市内分布図



**ドブシジミ** *Sphaerium (Musculium) japonicum* (Westerlund, 1883)

評価区分

名古屋市2020	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2020	リスト外
環境省2020	リスト外

**【選定理由】**

本種は、富栄養化した流れの緩やかな水路に多産するとされる(木村, 1994)。しかし、2017年の市内61地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査では、千種区名古屋大学敷地内、千種区東山動植物園ビオトープ、港区東茶屋の水田、守山区中志段味沢田の水田の4地点でしか発見されず、棲息地点数・個体数ともに少なかった(川瀬, 2018a)。また、1950~60年代に汁谷・竹越、守山瀬古、平田橋・神明、鶴舞公園に棲息していた記録がある(田中, 1964)。鳳来寺山自然科学博物館には東春日井郡守山町瀬古(現名古屋市)で昭和13年5月27日に採集された標本が所蔵されている(川瀬, 2018b)。

愛知県(名古屋市を除く)では1950年代に4地点からの報告がある(田中, 1959)。

**【形態】**

殻は小さく、殻長5~10mm程度、薄質で膨らみ、白色~灰黄色の半透明。殻表には細かい成長線があり光沢をもつ。殻の前後はほぼ相同で、殻頂は中央に位置する。本種はツノイロドブシジミ属 *Sphaerium* ではなくドブシジミ属 *Musculium* の種であることが指摘されている(栗原, 2011)。



ドブシジミ, 鳳来寺山自然科学博物館所蔵  
東春日井郡守山町瀬古(現名古屋市), 昭和13年5月27日

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

上述した3区4地点のほか、中川区と天白区の各1地点からも発見されているが個体数は極めて少ない。

**【県内の分布】**

豊田市、新城市、西尾市など県内各地。

**【国内の分布】**

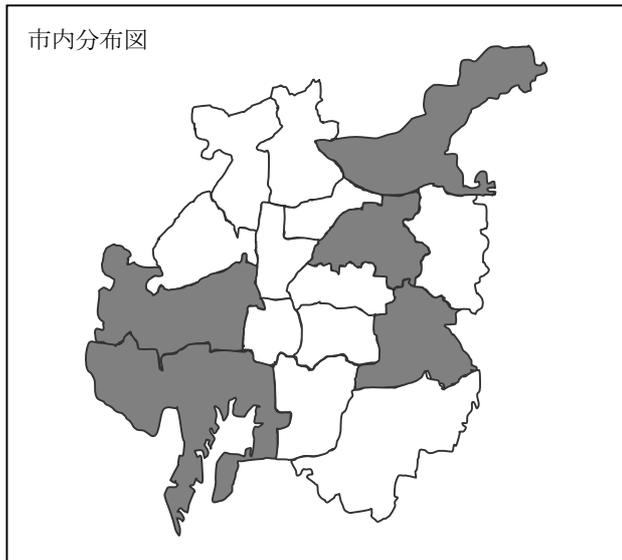
全国各地

**【生息地の環境／生態的特性】**

流れの緩やかな水路や水田、ため池などの泥底に棲息するが、小型種であるため全国的に調査不十分な地域が多いと考えられる。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

市内6地点で確認されているが、多くの地点では個体数が極めて少ない。水田においては農薬の影響があると考えられるが詳細な減少要因は不明である。もともと市内の生息地点と個体数が少なかった可能性もある。



**【保全上の留意点】**

水田の水質・底質の汚濁防止。

**【引用文献】**

川瀬基弘, 2018a. なごや生きもの一斉調査・2017~なごやで探そう! 水の中の妖精~淡水貝編 報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.  
川瀬基弘, 2018b. 減びゆく愛知県の淡水産貝類一鳳来寺山自然科学博物館所蔵の淡水貝標本一. 鳳来寺山自然科学博物館報, 47: 41-46.  
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, 33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.  
栗原康裕, 2011. 北海道東部におけるドブシジミ科貝類相. 日本貝類学会平成23年度福岡大会研究発表要旨集: 18-19.  
田中守彦, 1959. 愛知県産淡水産貝類目録(謄写版). 14 pp.  
田中守彦, 1964. 名古屋市産淡水産貝類の研究(謄写版). 20 pp.

**【関連文献】**

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.  
川瀬基弘・市原 俊・寺本匡寛・鶴飼 普, 2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性, 5: 33-45.  
紀平 肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159 pp. ピーシーズ, 東京.  
増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ, 東京.

(川瀬基弘)

カワニナ *Semisulcospira libertina* (Gould, 1859)

評価区分

名古屋市2020	情報不足
愛知県2020	リスト外
環境省2020	リスト外

【選定理由】

本種は 1950～60 年代に市内各地に棲息していたが（田中，1964）、1980 年代には市内でほとんど見られなかったという情報があり、市内では絶滅寸前まで棲息地が減少した可能性が高い（川瀬ほか，2018）。現在の市内の棲息地はホタル養殖やビオトープ作りにより人為的に放流された場所が多く、自然分布は確認できなかった。

田中（1964）の確認地点は、本星崎、天白橋、野並橋、菅田橋、島田橋、中根、植田橋、石川大橋、鳴海・白山、鳴海・天白、覚王山・法生池、汗谷・竹越、猪高弘山、守山瀬古、味鋺県営住宅、味鋺市営住宅、洗堰・蛇池、中小田井、名城濠、下ノ一色、富田町江松、野立、中野新町である。

【形態】

殻は高円錐形、殻高は 30～40mm 前後、螺塔は 3～5 層程度。殻高に対する螺塔の割合は 2/5 くらいで、残り 3/5 が体層を占める。一般的に殻頂部は欠損する。縦肋はない。殻底肋は 9 本前後のものが多い。殻表は黒褐色の殻皮で覆われ、内面は白色。縫合は浅い。殻口は卵形、外唇は薄くやや張り出す。蓋は革質で褐色、小旋型。



カワニナ  
天白区野並二丁目，郷下川，2017年9月8日

【分布の概要】

【市内の分布】

市内分布図（川瀬，2018）のとおり 2017 年には守山区、千種区、名東区、天白区で確認されたが、多くは人為的な放流による個体群の可能性が高い。

【県内の分布】

県内各地

【国内の分布】

日本全国

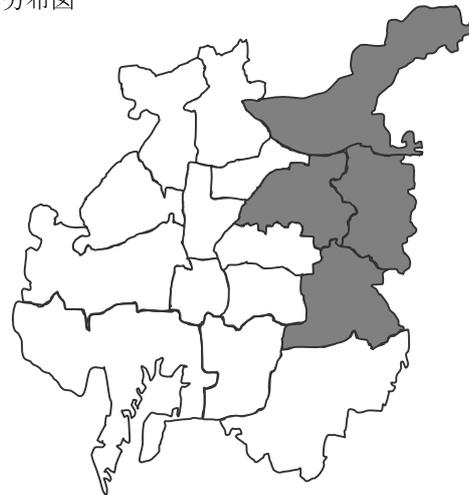
【生息地の環境／生態的特性】

河川、用水路、湖沼、ため池などの比較的有機質な砂泥底～砂礫底。雌雄異体の卵胎生、育児嚢をもつ。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の市内の棲息地のほとんどはホタル養殖やビオトープ作りのため人為的に放流された個体群である可能性が高い。高度経済成長期の棲息環境の破壊や水質汚濁等により激減した可能性が高い。

市内分布図



【保全上の留意点】

水質・底質の汚濁、コイの放流、ホタル養殖やビオトープ作りによる乱獲などの防止。

【引用文献】

川瀬基弘，2018. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書，40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋。  
川瀬基弘・市原 俊・寺本匡寛・鶴飼 普，2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性，5: 33-45.  
田中守彦，1964. 名古屋市産淡水貝類の研究(謄写版). 20 pp.

【関連文献】

愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。  
川瀬基弘・寺本匡寛，2018. なごや生きもの一斉調査～淡水貝編～. 平成 29 年度なごや生物多様性保全活動協議会活動報告書:22-25, なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋。  
紀平 肇，1990. 琵琶湖淀川淡水貝類，131pp. たたら書房，鳥取。  
紀平 肇・松田征也・内山りゅう，2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類，159 pp. ピーシーズ，東京。  
木村昭一，1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報，33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会。  
増田 修・内山りゅう，2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ，東京。  
田中守彦，1959. 愛知県産淡水産貝類目録(謄写版). 14 pp.

チリメンカワニナ *Semisulcospira reiniana* Brot, 1877

評価区分

名古屋市2020	情報不足
愛知県2020	リスト外
環境省2020	リスト外

【選定理由】

1950～60年代に市内からの記録はなく（田中，1964）、1980年代には名古屋市内でほとんど見られなかったという情報があり、市内では絶滅または絶滅寸前まで棲息地が減少した可能性が高い（川瀬ほか，2018）。現在の名古屋市内の棲息地については、ホタル養殖やビオトープ作りによりカワニナ類が人為的に放流された場所が多く、カワニナの自然分布については確認できなかった。2017年に実施された名古屋市内61地点の淡水産貝類の一斉調査では、守山区、千種区、昭和区、天白区、中川区の5区6地点で確認されているが（川瀬，2018）、これらの多くは人為的放流による個体群である可能性が高い。

【形態】

殻は高円錐形、殻頂方向へ緩やかに細くなる。殻高は30～40mm前後、螺塔は4～5層程度。一般的に殻頂部は欠損する。縦肋の顕著な個体が多いが不明瞭な場合もある。殻底肋は6～12本で9本前後のものが多い。殻表は黒褐色の殻皮で覆われ、内面は白色。縫合は浅い。殻口は卵形、外唇は薄くやや張り出す。蓋は革質で褐色、小旋型。



チリメンカワニナ  
守山区上志段味東谷 大矢川，2017年9月1日

【分布の概要】

【市内の分布】

市内分布図（川瀬，2018）のとおり2017年には守山区、千種区、昭和区、天白区、中川区で確認されたが、多くは人為的な放流による個体群の可能性が高い。

【県内の分布】

県内各地

【国内の分布】

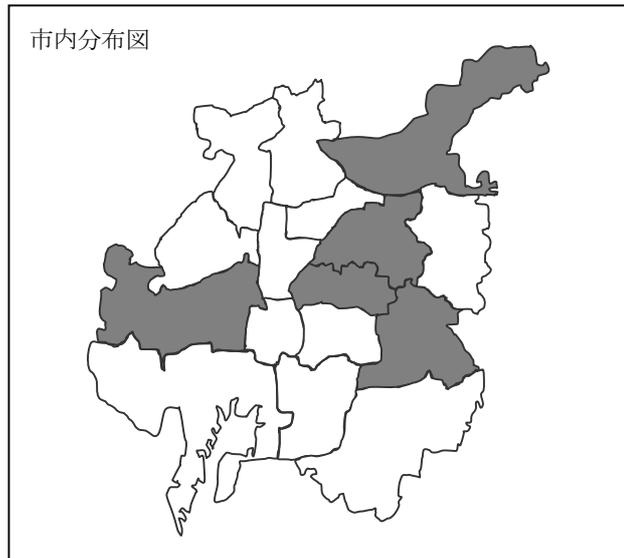
東北～西日本（増田・内山，2004）

【生息地の環境／生態的特性】

河川、用水路、湖沼、ため池などの比較的有機質な砂泥底～砂礫底。雌雄異体の卵胎生、育児嚢をもつ。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の市内の棲息地のほとんどはホタル養殖やビオトープ作りのため人為的に放流された個体群である可能性が高い。古い記録が少なく、もともと市内には棲息していなかったか、棲息地点数・個体数ともに少なかった可能性がある。



【保全上の留意点】

水質・底質の汚濁、コイの放流、ホタル養殖やビオトープ作りによる乱獲などの防止。

【引用文献】

川瀬基弘，2018. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書，40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋。  
川瀬基弘・市原 俊・寺本匡寛・鶴飼 普，2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性，5: 33-45.  
増田 修・内山りゅう，2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ，東京。  
田中守彦，1964. 名古屋産淡水貝類の研究(贈写版). 20 pp.

【関連文献】

愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。  
川瀬基弘・寺本匡寛，2018. なごや生きもの一斉調査～淡水貝編～. 平成29年度なごや生物多様性保全活動協議会活動報告書: 22-25. なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋。  
紀平 肇，1990. 琵琶湖淀川淡水貝類，131pp. たたら書房，鳥取。  
紀平 肇・松田征也・内山りゅう，2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類，159 pp. ピーシーズ，東京。  
木村昭一，1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報，33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会。

(川瀬基弘)

**フネドブガイ** *Anodonta (Anemina) arcaeformis* (Heude, 1877)

評価区分

名古屋市2020	情報不足
愛知県2020	情報不足
環境省2020	リスト外

**【選定理由】**

2019年12月に西区庄内緑地公園のGamma池の池干しにより名古屋市で初めて発見された。愛知県では2011年に犬山市の入鹿池とその周辺から初めて本種が報告され（近藤ほか, 2013）、その後、1990年に豊橋市大岩町字火打坂の三ツ池(下池)で採集された標本が保管されていることが明らかになった（西ほか, 2014）。さらに2017年に豊橋市岩田町字上庄の上庄池からも発見された（坂本ほか, 2019）。レッドリストあいち2015（愛知県環境部自然環境課, 2015）では、移入個体群である可能性から情報不足に選定されている。一方、近藤ほか（2013）は愛知県犬山市の個体群を在来個体群とみなしている。

名古屋市西区庄内緑地公園の本種が在来個体群である確かな証拠がなく、移入個体群である可能性も否定できないことから情報不足とした。

**【形態】**

殻は楕円形、膨らみは強い。殻長145mm、殻高91mm、殻幅75mm。殻表は黒色～黒褐色で幼貝は緑色を帯びる。他のドブガイ属に比べて殻頂が中央寄りに位置する。背縁と腹縁がほぼ並行になる。



フネドブガイ  
西区庄内緑地公園（Gamma池）、2019年12月8日

**【分布の概要】**

**【市内の分布】**

西区庄内緑地公園（Gamma池）

**【県内の分布】**

犬山市（近藤ほか, 2013）や豊橋市（西ほか, 2014；坂本ほか, 2019）のため池や河川

**【国内の分布】**

北海道、本州、四国（近藤, 2008）

**【生息地の環境／生態的特性】**

砂泥～軟泥底に生息する。2年で性成熟し、寿命は10年程度（近藤, 2008）。

**【現在の生息状況／減少の要因】**

市内での生息地は西区庄内緑地公園のGamma池のみであり、水路で連続するボート池には棲息していない。

**【保全上の留意点】**

国内移入種か、或いは在来種かを見極めることが重要である。

**【特記事項】**

近藤（2008）によれば、フネドブガイには殻頂部が背縁より高く盛り上がるフネドブガイ型（form *arcaeformis*）と、背縁よりも盛り上がらないタブネドブガイ型（form *flavotincta*）の2型があるとされているが、西区庄内緑地公園（Gamma池）で確認された数百個体のフネドブガイは全てフネドブガイ型であった。



**【引用文献】**

愛知県環境部自然環境課, 2015. レッドリストあいち 2015. <https://www.pref.aichi.jp/soshiki/shizen/0000079215.html>  
 近藤高貴, 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜 日本貝類学会特別出版物第3号, 69 pp, 日本貝類学会, 東京.  
 近藤美麻・秋山吉寛・ノエリカント ラマモンジソア・伊藤健吾・千家正照, 2013. 東海地方初記録の淡水二枚貝フネドブガイ *Anemina arcaeformis* (イシガイ科: ドブガイ族). ちりぼたん, 43: 58-64.  
 西 浩孝・坂本博一・松岡敬二, 2014. 三河地方初記録の淡水生二枚貝フネドブガイ. 豊橋市自然史博物館研究報告, 24: 21-23.  
 坂本博一・西 浩孝・松岡敬二, 2019. 豊橋市の上庄池と大口池で確認された淡水動物. 豊橋市自然史博物館研究報告, 29: 13-20.

**【関連文献】**

増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ, 東京.